多摩 山河あり 夏 ⑥

公園を自然体験の場へ

小金井、調布、三鷹3市にまたがる都立野川公園の自然観察園。7月26日、真夏の日差しが容赦なく照りつける中で、野川公園緑の愛護ボランティアの会の会員が青丈ほどもある雑草を取り除いていた。

会員と一緒に作業していた2年目のレンジャー平山加奈子さん(27)が、引き抜いたばかりのオオブタクサを手に話した。「これらを除去しなければ、本来あるはずの在来植物が育たなくなってしまうのです」

平山さんが所属するNPO「birth」（バース、本部・西東京市）は、野川公園の指定管理者を民間企業3社と共に担う。平山さんの仕事は、約40万平方㍍の園内のパトロール、動植物の調査や希少種の保護、自然情報を発信することなどだ。

「自然の中で人と接して働きたい」。東京農工大学大学院（府中市）で自然環境保全学を修めて2011年4月、バースに就職した。国立公園を管理する環境省のレンジャーも選択肢としてあったが、事務仕事が中心だったり本庁で勤務したりと、自然の現場から離れてしまうのではと考えた。

この日、自然観察園の林内のあちこちでウバユリが大輪の花を咲かせていた。発芽して花を付けるまでに7年ほどもかかるといい、「長期間にわたって林の手入れが適切に行われてきた証拠。ボランティアのお陰ですね」と平山さん。

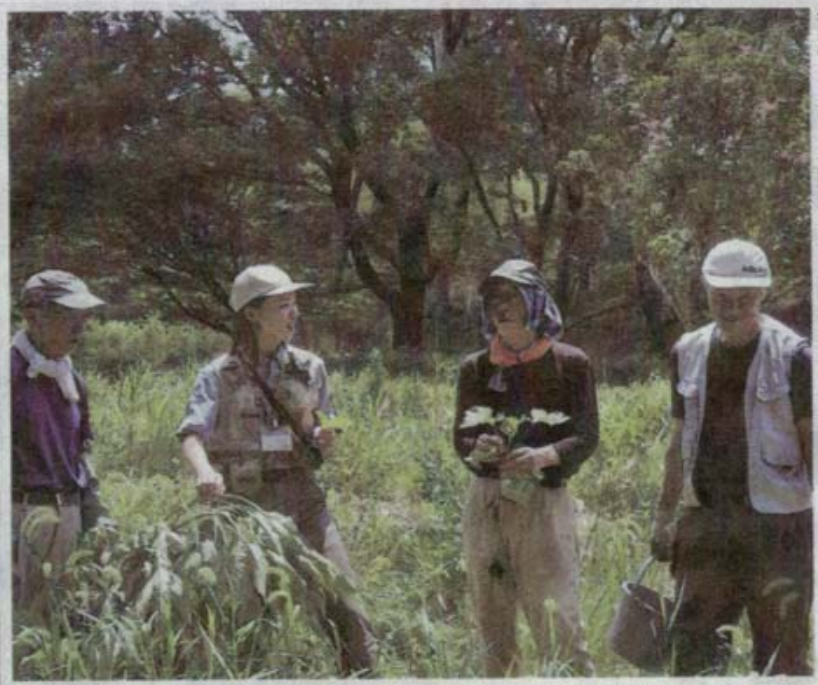
同公園緑の愛護ボランティアの会は1988年、自然観察園の開園に伴い、都の公募によって設立された。現在の会員は99人で60～70歳代の男性が中心だ。樹木の手入れやホタルが生育する水路の整備、定期的な自然観察会などを行っている。

平山さんについて、会員で三鷹市中原の中根康昌さん(70)は「赴任した当初はちょっと頼りなく感じたが、若くて意欲もあるので、最近は足が地に着いてきた」と目を細める。

平山さんは約1年前にあった出来事が今も、強く記憶に残っている。

祖母と一緒に自然観察会に参加した2歳の女の子に「どの鳥が好き？」と聞いたところ、キョトンとした表情で答えが返ってこなかった。「『好きという言葉よりも、どれがいい？ と聞いたほうが分かりますよ』というおばあちゃんのアドバイスで解決しました。私としては分かりやすく聞いたつもりだが、この子には難しい言い方だったのです」

平山さんは反省を口にしつつも、日に焼けた顔から白い歯を見せて自標をはっきり語った。「都市部に住む子どもにとって、最初に出会う自然が都立公園ということも十分ありえます。だから、とっておきの自然体験をさせてあげられるレンジャーになりたい」



外来植物の除去をしながらボランティアと会話するレンジャーの平山加奈子さん（左から2人目）

わき水広場の小川では、遊ぶ子どもたちの姿も

☆納涼ポイント 平山さんのお勧めは公園内の「わき水広場」。木陰でわき水や小川の流れを聞くことができる。夕方近くはヒグラシの合唱も始まり風情が増す。問い合わせは野川公園サービスセンター（042・31・6457）。

生徒にその都度謝罪させた はしてきた。被害届を出す
さ し た え ん 311

季節のお酒
澤の井
○さわ
○涼

平和の
15日ま

羽村市民が

富山・

立川署が、学部人文学科を、都迷惑防止条（の疑いで）ていたことが た。逮捕は1支部は3日、簡裁に略式起 同日、立川簡 万円の略式命 日納付した。 同署幹部に 授は1日午前 JR国立駅構